

『古事記』に載録された

天之日矛の話の構造について

福 島 秋 穂

今日私たちが「神話」或は「伝説」の如き名称を冠するところの口承文芸作品は、多くは其の創作が文字の発明に先行したり、文字の発明された後にも、識字階級の人々と無縁であつたりしたために、其れが創作されるや直ちに筆録されるといふことがなく、長期間に亘り、口で語られることを、耳で聴いて頭に留めて保存し、更に其れを口で語り聴かせる、というようにして次代へと伝達されていたので、其の間に当然のことながら、原創作者が表現しようと思つたこととは異なる解釈をなされて、意図的に或は無意識的に変改されることが多くあつた。従つて私たちが今日文献に載録されている「神話」・「伝説」の類を眼にする場合、其処に記されていることが、其のまま物語の発生原初形態を留めたものであり、其処に原創作者の意図が直截に表現されていると考えるならば、其れは大きな誤りを犯すことになる。また、「神話」や「伝説」に限らず、民間に発生し、創作者を一個人に比定することの出来ない物語の変化発展は、其れが口承伝達される間にも起り得ることではなく、一度文献に記載されて後にも、

屢々起きることであつた。

例えば、私たちは其の具体例を、仮りに「竜樹菩薩の王宮侵入譚」と名付ける物語、即ち、竜樹菩薩が在俗中朋友と語らい、姿を隠すことの出来る業を用いて王宮に侵入し、王妃たちを犯すが、此の時王は、眼に見えぬ者の正体を明らかにすべく宮中に粉末状の物を撒布する、という話、の表記の変遷にみる事が出来る。此の撒布される物質が、「竜樹菩薩伝」・「付法藏伝」を引いて同譚を紹介する、七世紀後半出来の『法苑珠林』では「細土」とされ、十二世紀初頭に成つた『今昔物語集』と平安時代末期に出来した『打聞集』では「粉」即ち「はうに」、平安後期の成立とされる『梅沢本古本説話集』においては「灰」、宋代の『仏祖統紀』では「細土」、永享三（一四三二）年に成つたかと言われ『三國伝記』では「細ナル土灰」とされ、正保三（一六四六）年版を最古の版とする『真言伝』では「細土」と、同一の話扱いながらも微妙な変化を見せている。更に其の粉末状物質撒布の理由が、一方で、「若是方術、其跡自現、設鬼魅入、必無其跡」

(法苑珠林)、「若是方術、其跡當見。設是鬼魅入、必無迹」(仏祖統紀)、「若シ鬼神ナラハ不可有跡」(三國伝記)、「若是方術ナラハ。其ノ跡現スヘシ。若是レ鬼魅ナラハ跡アルヘカラス」(真言伝)と語られ、他方では、「身隠者也云、足形付行方顯」(今昔物語集)、「身を隠すものなりとも、足形つきて、行かん所は著く現れなむ」(古本説話集)、「身を隠す物なりとも足がたの付ていかむ所は、しるく顯なむ」(打聞集)と記されるのである。

同一の物語が文献に載録された後においてすら見たような変化を生じていることを思えば、所謂口承文芸作品としての「神話」「伝説」の類が、其の時々の解釈に基づき、種々変遷の過程を辿ったことは想像に難くない。なお、此処で一言付け加えるならば、『古事記』崇神天皇条に記載された「三輪山伝説」中に、陶津耳命の娘活玉依毘売の許を、夜半訪れる男の正体を知る目的で、「以赤土散床前」とあるのを、宣長が、「此赤土に着たらむ足跡を視て、其人の出住し方を知むとの説か」と解したのは、上掲「童樹菩薩の王官侵入譚」を『今昔物語集』や『打聞集』などにより読んでいた結果ではないかと思われる。

前置きが長くなったが、此の度は、『古事記』に記載された「天之日矛の我国への渡来事情説明譚」について、其の構成、各構成要素の発生原初段階における形態と其れが発展・変化、といったことを考えてみたい。

『古事記』中巻の応神天皇条に、

又昔、有新羅国主之子。名謂天之日矛。是人参渡来也。

所以参渡来者、新羅国有一沼。名谓阿具奴摩。自阿下四字以音

此沼之边、一贱女昼寝。於是日耀如虹、指其脸上、亦

有二贱夫、思異其状、恒伺其女人之行。故、是女人、自

其昼寝時、妊身、生赤玉。爾其所伺贱夫、乞取其玉、恒

裹著腰。此人营田於山谷之間。故、耕人等之飲食、負一

牛二而、入山谷之中、遇逢其国主之子、天之日矛。爾問其

人曰、何汝飲食負牛入山谷。汝必殺食是牛。即捕其人、

將入獄囚、其人答曰、吾非殺牛。唯送田人之食耳。然

猶不赦。爾解其腰之玉、幣其国主之子。故、赦其贱夫、

将来其玉、置於床边、即化美麗娘子。仍婚為嫡妻。爾

其娘子、常設種種之珍味、恒食其夫。故、其国主之子、心

奢習其妻、其女人言、凡吾者、非心為汝妻之女。將行

吾祖之國。即竊乘小船、逃遁渡来、留于難波。此者坐難波之

阿加流比。此者坐難波之於是天之日矛、聞其妻遁、乃追渡来、……

と記される「天之日矛の我国への渡来事情説明譚」は、『日本書

紀』では、神功皇后を含めて応神天皇より五代前の垂仁天皇三年

のこととして、極く簡略に、「春三月、新羅王子天日槍来帰焉」

と記されているに過ぎないが、後述するように、主人公を「意富

加羅國王之子」としていることや、物語の構成上の類似から推し

て、明らかに『古事記』の上掲記事と同源より出たと思しき話

が、同じ垂仁天皇の二年是歲条下に、「云」として分注の形で、
初都怒我阿羅斯等、有国之時、黄牛負田器、将往田舎、
黄牛忽失。則尋迹覓之。跡留一郡家中。時有一老夫曰、

汝所求牛者、入於此郡家中。然郡公等曰、由牛所負物而推之、必設殺食。若其主覓至、則以物償耳、即殺食也。若問牛直欲得何物、莫望財物。便欲得郡内祭神云爾。俄而郡公等到之曰、牛直欲得何物。对如老父之教。其所祭神、是白石也。乃以白石一授牛直。因以将来置于寝中。其神石化美麗童女。於是、阿羅斯等大歡之欲合。然阿羅斯等去他処之間、童女忽失也。阿羅斯等大驚之、問己婦曰、童女何処去矣。对曰、向東方。則尋追求。遂逐浮海以入日本国。所求童女者、詣于難波、為比売語曾社神。且至豊国国前郡、復為比売語曾社神。並二処見祭焉。

と記載されている。また、『播磨国風土記』には、「天日槍命、從韓國一度來」(揖保郡粒丘条)という記事を始めとして、天日槍命と葦原志(葦原志乎命)或は伊和大神とに關する記事が、数箇所に記されている。なお、『万葉集註釋』が引く『撰津国風土記』に、「比売島松原。古、輕島豊阿伎羅宮御宇天皇世、新羅国有二女神、遁去其夫來、暫住筑紫国伊波比乃比売島名。乃曰、此島者、猶不遠。若居此島、男神尋來、乃更遷來、遂停此島。故取本所住之地名、以為島号」とあるのも、女性の新羅國から我國への逃走と男性の追跡を題材とし、事件の起きた時期を輕島豊阿伎羅宮御宇天皇(応神)の時としていることや、難波比売若曾と撰津比売島の表現などから推して、其処に天之日矛(天日槍)の名は見えないが、明らかに『古事記』の上掲記事と同源より出たものであると考えられる。更にまた、『古語拾遺』も垂仁天皇の時代のこととして、「新羅皇子、海檜檜來帰」と記している。

『古事記』に載録された「天之日矛の我國への渡來事情説明譚」のうち、「一賤女昼寝。於是日耀如虹、指其陰上、……(中略)……是女人、自其昼寝時、妊身、生赤玉」と表現された所謂日光感精説話は、既に先人の報告にも明らかかなように、我國の近隣に例の多いものである。今、『古事記』の記すように、A一女性が睡眠中、B日光に感じ、C妊娠・出産する、といった物語構成要素を備えた「日光感精説話」の二・三を紹介するならば、次の如くである。隣邦中国の場合、所謂十七史の一、「晋書」に、「慕容徳字文明、號之少子也。母公孫氏夢日入膺中、昼寝而生徳」とあり、同じ十七史中の『魏書』に、「太祖道武皇帝、諱珪、昭成皇帝之嫡孫、獻明皇帝之子也。母曰獻明賀皇后。初因遷徙、遊于雲沢、既而寢息、夢日出室内、寢而見光自膺風天、欸然有感。以建国三十四年七月七日、生太祖於參合陔北、其夜復有光明」、「世宗宣武皇帝、諱恪、高祖孝文皇帝第二子。母曰高夫人、初、夢為日所逐、避於牀下、日化為竜、繞已數匝、寢而驚悸、既而有娠。太和七年閏四月、生帝於平城宮」と記され、此れも十七史の一、「北齊書」に、「後主諱緯、字仁綱、武成皇帝之長子也。母曰胡皇后、夢於海上坐玉盆、日入裙下、遂有娠、天保七年五月五日、生帝於并州岷」という記事が見える。此処に引いた三書のうち、北齊の魏取撰する『魏書』は、北魏の正史ながら、編纂者が私情をもって史実を歪曲したと言われ、今日「穢史」の非難を蒙る書であるが、同書成立の頃から、『北齊書』の成った七世紀中葉、或は此の『北齊書』と同じく唐の太宗の命により出来した

『晋書』の成立時、即ち『古事記』成立以前に、既に中国に「日光感精説話」が存在していたことは、上掲の記事より明白である。また、前掲『魏書』には別に、女性が日光に感じた時を睡眠中とはしていないが、朝鮮半島のこととして、「高句麗者、出於夫余、自言先祖朱蒙。朱蒙母河伯女、為夫余王閉於室中、為日所照、引身避之、日影又逐。既而有孕、生一卵、大如五升。……(中略)……一男破殼而出」と記されている。此の高句麗の始祖東明聖王(朱蒙)誕生に関する話が、「穢書」に記されていること、朝鮮本土での其れが文献への定着時を、今日『三國史記』の編纂された十二世紀にまでしか遡れないこと、などからすれば、諸家此の伝承をもって朝鮮半島固有のものとして疑われないが、果たして此の伝承の総てが真に朝鮮本土で創作・伝承されていたものであるのか、女が卵を産み、其の卵から後に國王となる子が出現する、という始祖誕生譚を自生させていた朝鮮半島の人々が、其れと、古くより漢民族の皇帝誕生に纏わる話として、中国で屢々語られていた可能性のある「日光感精説話」とを、為にするところあって結合・伝承していたものか、俄かには決し難い。しかし、見たように、天之日矛(天日槍)が「新羅國主之子」(記・紀)、「新羅王子」(紀)、「從韓國度來」(播磨國風土記)、などと記されていること、中国の「日光感精説話」及び其れと密接な関わりを有すると思われる漢の武帝誕生譚或は孫権誕生譚、更にはまた、「采女夢月墮懷中、遂孕。天監七年八月丁巳生帝」と記される梁の世祖孝元皇帝誕生譚や、『淵鑑類函』が「遁甲開山図解」を引いて、「女狄暮汲紐山下泉。水中得月精如雞子、愛而含之。不覺

而吞、遂有娠。十四月生夏禹」と記す「太陰感精説話」、内容の面から推して、此れらと一脈の関連を有するに違いない。漢の孝元帝誕生譚や、上掲孫権誕生譚と共に記される孫策誕生譚、等々が孰れも女性による嬰兒出産の話であるのに対し、『古事記』の記載する「日光感精説話」と高句麗の始祖誕生に纏わる話とが、「赤玉」或は卵といった異物の産出譚であること、からすれば、既に諸家の指摘した通り、此の二者の間に直接の関連があることは、まず間違いない。ただ、『古事記』に見える「日光感精説話」が、朝鮮半島より伝播したものであるのか、中国より一旦我国に入った其れが、朝鮮半島へ伝播されたものであるか、は判然とし難い。後述するように、女性による卵の産出譚は多くあるが、「赤玉」の如きを産出した女性の話をほとんど見ないこと、「赤玉」より卵への変化と其の逆の場合とを考えると、後者の方がより自然な変化であると思われること、などからすると、朝鮮で伝承されていた話が、我国へ伝わったとする方が蓋然率は高いと言えるだろうが、確実にそうだったとは言い切れない。なお、朝鮮半島からは、日光或は星辰に感じた女性が嬰兒を出産する民間伝承も採集されているが、其の採集時期は新しく、『古事記』の「日光感精説話」との直接の関連を考えることは難しい。

人間に関わることではないが、日光に感じた牝牛により、アーピス或はエバボスと呼ばれる仔牛の産出される話が、エジプトのこととして、ヘロドトスの『歴史』に見える。またインドには、天界より自が胎内に火焔の天降るを夢見た女性が、比類無い美姫を産んだという話がある。

これらの話は、其れが語る内容や其の伝承地の關係から言つても、此処で考察の対象として『古事記』記載の「日光感精説話」と直接繋がり有すると俄には考えられない。しかし、記紀兩書に載録された「神話」・「伝説」の類には、所謂呪物投擲逃走譚の如く、明らかに西歐世界の其れと繋がるもののあること、「日光感精説話」に似た内容を有する話を例に挙げれば、六牙の白象に乗る菩薩が自らの体内に入るを夢見た摩耶夫人は、やがて釈迦を産んだ、というインドの説話が、中国に入り、既に「日光感精説話」を伝承・保存していたに違いない漢民族の物語創作或は変改の意欲を刺激したか、其の地に僧智誕生に關する同様の説話を發生せしめ、兩説話がともどもに我国に伝来され、新たに聖徳太子・弘法大師などの誕生譚を産んだと思われること、などを考え合わせると、案外中国や朝鮮の「日光感精説話」を問にして、間接的には關係のあるものかも知れない。此れまで、「天之日矛の我国への渡来事情説明譚」中の「日光感精説話」については、中国・朝鮮、特に後者の其れとの関わりばかりが重視されてきたらしいがあるが、今後少しく視野を拡げて丁寧なインドや西歐世界の類話を蒐集し、其れらを詳細に比較・検討する必要があるらうである。

『古事記』の「日光感精説話」と『三國史記』に見える其れとは、既述したように、日光に感じた女性が、嬰兒ならぬ「赤玉」・「卵」を産み、前者が後に「美麗嬪子」に變じ、後者の場合、「其母以物裹之。置於暖処。有一男子。破殼而出」とされ、やはり

『古事記』の場合と同じ変化の過程を経てゐる。

此の赤玉・卵の出産と其れが人間への変化が、「日光感精説話」に元來存在しなかつた物語構成要素であることは、既に見た幾つかの「日光感精説話」、或は物語構成要素の類似より推して、其れと密接な関わりを有するに違いない「太陰感精説話」、女性が妊娠後に日光に感じて尋常ならざる子を産む、といった類の話が、孰れも女性による嬰兒其のものの出産を語っていることから明白である。

卵から人間が誕生する話、或は女性が卵を産み、其の卵から人間が出現する話は、「日光感精説話」同様、我國の周辺でかなり古くから創作・伝承されていたらしく、文献に記載された例も多い。まず、卵から人間が生まれた話、或は内容的に見て此れに近い話を紹介すると、仏典中の「世羅那波世羅生從鶴卵」という記事、「元微中、暨陽泉女人於黄山穴中得二卵、如斗大、剖視有人形」⁽²⁹⁾、「瞻博、或曰瞻婆、北距統伽河。多野象群行。顯慶中、与婆岸、千支弗、舍跋若、磨臘、四国並遣使者入朝。千支在西南海中、本南天竺屬国、亦曰半支跋、若唐言五山也、北距多摩婁。……(中略)……其王名骨利、詭云得大卵、剖之、獲女子」⁽³⁰⁾、「嘉靖四年、長垣民王憲家、雞抱卵、内成人形、耳目口鼻四肢皆具」という中国史書の記事、我國では、「鶯の卵、女形にかへりて巢の中にあり」⁽³¹⁾、「於鶯巢中、得一小卵、卵化為此女」と記されるかぐや姫誕生譚、「始祖姓朴氏。諱赫居世。……(中略)……高墟村長蘇伐公。望楊山麓。蘿井傍林間。有馬跪而嘶。則往觀之。忽不見馬。只有大卵。剖之。有嬰兒出焉」という新羅の始祖赫居世誕

生譚、などがある。紙幅の都合で、今其の一一の紹介を省略するが、一匹の亀が十個の卵を産み、それらから八匹の亀と二人の人間、即ち男と女とが孵り、彼らが白い皮膚と黒い皮膚をした人間の祖となった、というアドミラルティ諸島の話のように、卵から最初の人類若しくは神が出現する話を、卵から人間が誕生する話の一変形、物語の創作伝承の過程で相互に少なからぬ影響関係を有するもの、と見ると、此れに類する話は更に多くなり、其れが伝承・保存されている地域も南方世界にまで拡大される。

一方、女性が卵を産み、其の卵から人間が出現する話についても、我々は此れを幾つか我國周辺に見ることが出来る。即ち、仏典に「舍衛國須達長者。末生小女。字曰蘇曼。……(中略)……懷妊生十卵。卵後開敷有十男子」といい、中国の古書に、「徐偃王志云。徐君宮人娠而生卵。以為不祥。棄之水浜。独狐母有犬。名曰鶻鶻。獵於水浜。得所棄卵。啣以來歸。独狐母以為異覆煖之。遂孵成兒」という話などは、其の代表的な例であり、「貉竜君貉竜王之子也。君娶帝來女。曰嫗姬。生百男俗生。是為百粵之祖」という記事に見える「俗伝」なども、百卵より百男が誕生したとはつきり断っていないが、明らかに前掲二話と同類のものである。同様の話は、インド・中国のみならず、蒙古、朝鮮、インドシナにもあり、其の分布地が、前に掲げた卵から人間の出現する話の場合と明らかに重複しており、其の物語構成からいっても、此れらは創作・伝承の過程で互いに影響を及ぼし合っていると考えられる。此れらの所謂卵生説話の出来は、恐らく、鳥獸が卵を産み、其の卵から子が孵る事実を知る未開・古代人が、最初の人類

或は異常な能力を有する人間や高貴な地位・身分にある人物の誕生を語るに際し、通常の人間の誕生とは異なる形で、其れを語るうと意図したこと、或は其の「卵生説話」を創作・伝承した未開・古代人が、例えば中国の原始的地理書『山海経』に、「有卵民之國。其民皆生卵即卵生也。」と記すように、自分たちと居住地を異にする人々は、其の生死・風俗・慣習等をはかり知ることの出来ない人種、または劣等人種である故に、鳥獸同様の誕生をすることもあらうと考えたこと、にでも端を発しているのであらう。

なお、王充の『論衡』に、「北夷獯離國王侍婢有娠。王欲殺之。婢對曰、有氣大如雞子、從天而下、我故有娠。後產子、捐於猪欄中。猪以口氣嘘之、不死、復徙置馬欄中、欲使馬籍殺之、馬復以口氣嘘之、不死。王疑以為天子、令其母收取、奴畜之、名東明、令牧牛馬」という記事が見え、此の東明誕生譚に見える獯離國が何処であるか判然としていないが、此れとほぼ同じ記事を載せる『隋書』が同國を高麗國としていふことと、物語の構成から見て明らかに朝鮮半島の「卵生説話」と関わりあるもので、『魏書』や『三國史記』の載録する「日光感精説話」の一変形としての東明聖王(朱蒙)誕生譚と密接な関連を有し、時間的に遠く遡ったところで、『古事記』に載録された「日光感精説話」とも繋がりを持つと思われる。王充の生存期間、広開土王の即位時期、『後漢書』・『隋書』そして『魏書』・『三國史記』の成立年を並記してみると、王充の生存期間が最も古く、広開土王の即位時期が此れに次ぎ、更に『後漢書』・『魏書』の順に出来し、『三國史記』の成立が最も遅れるので、既に述べたように、『魏書』・『三國史記』

記」の載録する東明聖王（朱蒙）誕生譚は、古く存在した「卵生説話」が「日光感精説話」を接合し、成長・発展したものであると知れる。

見たように、人間の誕生・出現に卵が絡む「卵生説話」は、我國の周辺地域にかなり存在しているのであるが、女性の産んだ玉が人間に交じりたり、其れから人間が出現したりする話、若しくは女性による出産以外の何らかの理由で此の世に存在する玉から人間が出現したり、其れが人間に交じりたりする話、の存在は此れまでに全くと言って良いほど報告されていない。我國周辺に「卵生説話」が多く伝承・保存されており、仮りに「玉生説話」とでも名付けるべき話が存在しないとすれば、『古事記』に載録された「天之日矛の我國への渡来事情説明譚」中に、「女人、自其屋寢時、妊身、生赤玉。……（中略）……其玉、置於床辺、即化美麗孌子」とある、「赤玉」の出産と其れが女性への変化は極めて特異な例であり、既に引いた高句麗の始祖東明聖王（朱蒙）誕生譚、或はインド・中国・朝鮮に存在する「卵生説話」の構成などに照らして、其れが出来た原初段階にあっては、「赤玉」が卵であった可能性が大である。もし、本来卵であったのが「赤玉」に変じたのだとすると、其の変化が伝承者による意図的改竄の結果なのか、物語伝承の間における自然変化なのか、が問題になるが、現在のところ孰れとも決し難い。ただ、卵から「赤玉」への変化が、何らかの依拠すべきことあつての結果とすれば、其の変化の契機となつたのは、天之日矛（天日槍）の将来した宝物中に、「珠一貫」（記）、「羽太玉一箇・足高玉一箇・鵜鹿鹿赤石玉一

箇」（垂仁紀三年春三月条・同八十八年秋七月条）、「葉細珠・足高珠・鵜鹿鹿赤珠」（垂仁紀三年春三月「一云」条）とあること、卵と玉との形態上の類似、我國古代人の玉に対する信仰心、そして物語中で「赤玉」と、其の色彩のみが特記され、格別其の形状について触れられることのない玉が、もし曲玉であつたとすれば、其の形体と胎児の其れとの類似、のうちの孰れかであつたらう。

「神話」・「伝説」といつた口承文芸作品が、口承・伝達される間もとより、一度文献に記載された後にあつても、屢々改変の手を加えられて変貌を遂げることは、本論の冒頭に「竜樹菩薩の王宮侵入譚」を例に挙げて述べた通りである。

以上の考察を極く手短かにまとめてみると、其れが自生したものであるか、他より伝来したものであるか不明ながら、『論衡』の記事より推して、古く紀元一世紀頃には既に朝鮮半島に存在していたと思われる「卵生説話」に、此れも原発生地は不明ながら、インド或はエジプトに其の淵源を求め得るやも知れぬ「日光感精説話」が、恐らくは中国より伝えられて接合され、更に此れが我國へ伝えられ、卵を赤玉に変じて、『古事記』に載録された「天之日矛の我國への渡来事情説明譚」の二部を構成することになつたのであろう、ということになる。

なお、『日本書紀』が「一云」という形で載録している都怒我阿羅斯等に関する記事中、「以白石授牛直。因以将来置手塚中。其神石化美麗童女」とある「白石」が、如何なる理由で此の世に存在し、「意富加羅國」の人々により神として祭られてい

たのか、また「一云」の「一」がどのような資料であるのか、判然としないが、石が「美麗童女」に変じたという話は、『日本書紀』の成立する以前、既に中国に存在していた可能性があり、『述異記』巻下に、「陽羨(45)小吏呉龔家在溪南。偶一日有掘頭船過水溪。内忽見一五色浮石。龔遂取帰置於牀頭。至夜化為女子。至曙仍是石。後復投於本溪」という話が記載されている。此の話は、五世紀頃の中国で一般民衆の間に流布していたものを、『述異記』の著者が採集・記録したのか、或は其の著者個人の脳裡で創作されたものか、現存『述異記』の成立事情に照らして時代的にもっと新しいものか、判断としないが、時間的には『日本書紀』の編纂者が此れを眼にした可能性を全く否定は出来ないで、あるいは二つの記事の間に何らかの関係があるのかも知れない。もし『日本書紀』の記事が、前述した『古事記』の場合同様、「卵生説話」より変じたものであるとすれば、其れは、天之日矛（天日槍）が「伊豆志（出石）」の地と関連する者として語られること、或は上掲『述異記』の記事、などに影響されて、もと「卵化美麗童女」と語られていたのが、「石化美麗童女」と変じた結果なのである。そして、「石」の色彩についてわざわざ「白」と断わったのは、卵の色からの連想でもあろうか。

此処でいま一度確認しておく、『古事記』に載録された「天之日矛の我國への渡來事情説明譚」に、日光に感じた女性が赤玉を産み、其の赤玉が化して嬪子となる、とあるのは、「日光感精説話」と「卵生説話」とが接合され、改竄の手を加えられた結果であり、両説話が結合した時点での物語構成は、a一女性が睡眠

中、b日光に感じ、c卵を産み、d其の卵から人の子が孵る、という形のものであったことになる。そして、『日本書紀』の垂仁天皇二年は歳条下に、「一云」という形で記される都怒我阿羅斯等の話は、1国王の子である主人公が、2玉の化した女性と関わりをもち、3其の女性が主人公の許を逃がれて難波へ到ると、4主人公も此れを追って朝鮮半島から我國へ渡來し、5女性は難波のヒメゴソ社の祭神となる、という物語の構成要素において、『古事記』の記載する「天之日矛の我國への渡來事情説明譚」と全く一致しており、主人公が玉を手に入れる過程でも、「汝飲食負牛入山谷。汝必殺食是牛」（記）、（由牛所負物）而推之、必設殺食」（紀）と、牛を登場させて同様の表現がなされ、玉が「美麗嬪子」（記）、「美麗童女」（紀）に変ずる場所も、「床辺」（記）、「寝中」（紀）とされるなど、共通点が多く、二つの伝承は同源より出たものであること明白であるが、其の成立は孰れが先であったか判然としない。しかし今仮りに、『古事記』の記事が『日本書紀』の其れに先んじて出来たとすれば、『日本書紀』の記載する話は、「日光感精説話」と「卵生説話」の結合した形の話から、前記したa・b・cの物語構成要素が脱落したことになり、其れでは簡より繁へという口承文芸作品の成長・変化の一般の傾向に反するので、「日光感精説話」・「卵生説話」を物差しとして考える限り、『日本書紀』の其れが『古事記』の其れより時間的には先に成立したとするべきであろう。仮令、『日本書紀』の記載から直接『古事記』の其れが生じたとせず、此れらとは別に、いま一つ第三の物語ともいべき伝承が存在していて、其れ

が記紀両書の載録する物語へと変貌を遂げたのだとしても、其の成立時の先後は変わるまい。第三の伝承からそれぞれ『古事記』、『日本書紀』の記載へと変化したとして、其れらが我国内の別個の土地、それも相互に隔絶した場所で作成したとすれば、あるいは其の成立時が逆転することもあり得ようが、前に掲げた両者の共通点から推して、其れも考え難い。

注(1) 道世著『法苑珠林』卷第五十三。

(2) 『今昔物語集』卷第四「竜樹、俗時、作オシゴケウラ、クニスワラフクシレノコト隠形業語第二十四」。

(3) 『打聞集』「竜樹菩薩隱形事」。

(4) 『古本説話集』卷下「竜樹菩薩先生以隱衣笠犯后妃事」。

(5) 志磐著『仏祖統紀』卷第五「十三祖竜樹尊者」。

(6) 玄棟著『三國伝記』卷第二「第十九 竜樹大士、術法昔事。証ニ外道法也」。

(7) 栄海著『真言伝』卷第一「竜樹菩薩」。

(8) 本居宣長著『古事記伝』二十三之卷。

(9) 倉野憲司著『古事記の新研究』、三品彰英著『増訂日鮮神話伝説の研究』等参看。

(10) 房玄齡等著『晋書』卷百二十七・載記第二十七・慕容徳。

(11) 魏收著『魏書』卷二・太祖紀第二。

(12) 同上書卷八・世宗紀第八。

(13) 李百柔著『北齊書』卷八・帝紀第八・後主。中国には此の種の伝承が多く存在したと見え、房玄齡等著前掲書卷百一・載記第一・劉元海、脱脱等著『宋史』卷四・本紀第四・太宗一、同書卷六・本紀第六・真宗一、同書卷三十七・寧宗一、同書卷二百四十二・列伝第一・后妃上に見える真宗誕生譚、同じく脱脱等著『遼史』卷一・本紀第一・太祖上、

班固著『漢武帝内伝』に見える武帝誕生の記事、王嘉著『拾遺記』卷第一・高辛条に記された帝嚳の妃鄒屠氏の娘による八子出産譚、などと史書・隨筆の類に記載されている。もっとも、『漢武帝内伝』の記す武帝誕生譚の場合、

「景帝夢神女捧日以授王夫人、夫人吞之、十四月而生武帝」(王朝小説本)と、事の顛末を簡略に記し、景帝夫人が日を呑んだ時、睡眠中であつたか否か判然としないうが、此れを同著者の『漢書』に見るに、「男方在身時、王夫人夢日入其懷」(卷九十七上・外戚伝第六十七上)とあつて、其の時、夫人が睡眠中であつたことは明確にしてあるものの、妊娠の事実と日光の件とが前後逆転しており、厳密には「日光感精説話」であるとは言ひ難い。此れをも同説話の範疇に入れるとすれば、同様の伝承に、『晋書』卷百一・載記第二・劉聰に見える同人の誕生譚、干宝著『搜神記』卷十の孫堅夫人呉氏による權出産譚がある。なお、上掲『遼史』の記載する耶律阿保機誕生譚や、宋濂・王禕等の撰になる『元史』に、『太祖法天啓運聖武皇帝、諱鉄木真、姓奇渥温氏、蒙古部人。其十世祖李端叉兒、母曰阿蘭果火、……(中略)……阿蘭寡居、夜寢帳中、夢白光自天窗中入、化為金色神人、來趨臥榻、阿蘭驚覺、遂有娠、産一子、即李端叉兒也」(卷一・本紀第一・太祖)と記された李端叉兒誕生譚が、純粹に契丹種或は蒙古族固有の伝承であるのか、漢民族の「日光感精説話」を借用したものか、判然としないう。

(14) 魏收著前掲書卷一百・列伝第八十八。

(15) 金富軾等著『三國史記』卷第十三・高句麗本紀第一・始祖。

(16) 李延寿著『南史』卷八・梁本紀下第八。

(17) 張英・王士禎等著『淵鑑類函』卷三三。

(18) 班固著『漢書』に、「李親任政君在身、夢月入其懷」(卷

九十八・元后伝第六十八)と見える。

(19) 千宝著前掲書に、「孫堅夫人吳氏孕而夢月入懷。已而生策」(巻十)とある。

(20) 孫晋泰著『朝鮮民謡集』一〇七頁、崔仁鶴著『朝鮮伝説集』二二〇頁、同著『朝鮮民話百選』一七二―一七三頁。

(21) ヘロドトス著『歴史』巻三の二十八。

(22) 岩本裕訳『カタール・サリット・サーガラ』(二) (岩波文庫) 六八・八二頁。

(23) 拙稿「記・紀に載録された呪物投擲逃走譚について」――『国文学研究』第六九集参看。

(24) 求那跋陀羅訳『過去現在因果経』巻第一。

(25) 非濁集『三宝感應要略録』巻中「第四十六 京兆僧智誦大般若経感應」。

(26) 前者は、『今昔物語集』巻第一「釈迦如来人界宿給語第一」、玄棟著前掲書巻第一「第一 釈迦如来出世之事」に、後者は、『今昔物語集』巻第七「震旦僧智誦大般若経二百巻語第四」、玄棟著前掲書巻第十一「第十四 京兆僧智誦三誦大般若二百巻一事」に見える。

(27) 金色の僧が、口中或は袂内に入るを夢見た欽明天皇皇女穴穗部間人の胎内に、後の聖徳太子が宿ったという話が、『聖徳太子伝暦』巻上、慶滋保胤著『日本往生極楽記』、源為憲著『三宝絵詞』中、鎮源著『大日本国法華経験記』巻之上、『今昔物語集』巻第十一、橘成季著『古今著聞集』巻第二、住信著『私聚百因縁集』巻第七、玄棟著前掲書巻第一、等に見える。弘法大師に關しても同様の話が語られ

『今昔物語集』巻第十一、聖賢著『高野大師御広伝』上、虎関師鍊著『元亨釈書』巻第一、玄棟著前掲書巻第三、円明著『弘法大師略頌鈔』、兼憲著『弘法大師御伝』巻上、三善為康著『拾遺往生伝』には、善仲善算兩上人・延暦寺座主内供奉安恵(巻上)、大法師淨蔵(巻中)、無動寺相応

和尚(巻下)、について類話が記されている。此のうち、善仲善算のことは、虎関師鍊著前掲書巻第十五にも見える。また、安恵誕生譚には、其の母が明星を呑むと夢見て彼を産んだとあるので、母親が夢に、太陽を呑み込むと見たり、懐中に日光・日輪の入るを見たり、更にはまた、此れも日光が胸に映じるを夢見たりした結果、智証(源為憲著前掲書下、住信著前掲書巻第七)、陽勝(大江匡房著『本朝神仙伝』、皇円著『扶桑略記』第二十三、醍醐天皇延喜元年八月同月条、虎関師鍊著前掲書巻第十八、高泉性澈著『東国高僧伝』巻第四)、良源(三善為康著『後拾遺往生伝』巻中)、日蓮(日澄著『日蓮聖人註画讃』)、秀吉(堀正意著『朝鮮征伐記』巻一)、が生まれた話と共に、直接「日光感精説話」の影響を受けて出来た説話として、別個に論ずべきかも知れない。

(28) 玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』巻第八。此の話は、普光著『俱舍論記』第八に詳細が記されている。

(29) 沈約著『宋書』巻三十四・志第二十四・五行五。

(30) 欧陽修・宋祁著『新唐書』巻二百二十二下・列伝第一百四十七下・南蛮下。

(31) 張延玉等著『明史』巻二十九・志第五・五行二。なお、李賢等著『大明一統志』に、「晋永嘉中有韓嬪者。於野中見巨卵。持哺育之、得嬰兒」(巻之二十・平陽府山川・金竜池条)、「雷撰一蛇卵、在山中、生一女」(巻之八十二・瓊州府祠廟・黎母廟条)という記事が見える。

(32) 『海道記』。

(33) 瑞溪周鳳著・惟高妙安拔萃『臥雲日件錄抜尤』第二・文安四年二月二十日条。同様の話は、土方久功著『パラオの神話伝説』(五一・九八・二九六頁)にも見える。

(34) 金富弼等著前掲書巻第一・新羅本紀第一・始祖赫居世。一然著『三国遺事』巻一・新羅始祖・赫居世王条にも、

「有一紫卵。一云青……(中略)……剖其卵得童男」とある。

(35) R. B. Dixon, *Oceanic, the Mythology of All Races*, p. 109. 同書には他に「ファイジー諸島・ブドミラルティ諸島・ニューブリテン島(一〇九頁)」「フィリピン・南東ポルネオ(一六九—一七〇)」「一七三—一七四頁」の類話が紹介されている。スマトラ在住のバタック族の間には、卵から最初の人類若しくは神が誕生する話のあることが報告されており(R. B. Dixon, *op. cit.*, p. 170. E. M. H. ロープ著・東亜研究所訳「スマトラの民族」上巻一—一六頁)、「インドにも卵から「原人」が誕生したという話がある(岩本裕訳前掲書(二〇頁))」。

(36) 晏宝唱等集『経律異相』卷第三十八「蘇曼女產十卵卵成十男并其往緣三」。同じ話は、慧覺等訳『賢愚經』卷第十三「蘇曼女十子品第五十八」、『今昔物語集』卷第二「須達長者蘇曼女生十卵語第十五」にも見える。また、同様の話は、曇曜訳『雜寶藏經』卷第一「蓮華夫人緣」、普光著前掲書第八、「今昔物語集」卷第五「般沙羅王五百卵初知父母語第六」に見える。

(37) 張華著『博物志』卷八(叢書集成本)。同じ話は、任昉著『述異記』巻下にも見える。

(38) 『大越史記全書』卷之一・鴻厯紀。

(39) 『蒙古源流』。

(40) 金富軾等著前掲書卷第一・新羅本紀第一・脱解、一然著前掲書卷二所引「駕洛國記」。なお、「広開土王碑文」に、「惟昔始祖鄭牟王之創基也出自北夫余天帝之子河伯女郎剖卵降出生子……」とあるのも、特に女が卵を産んだと断わっていないが、前に引いた『魏書』に載る高句麗の朱蒙誕生譚より推して、上掲二書の記事と同類のものであると考えられる。

(41) J. G. Scott, *Indo-Chinese, the Mythology of All*

Races, p. 292.

(42) 『山海経』第十五・大荒南経。

(43) 王充著『論衡』第二卷・吉驗第九(叢書集成本)。

(44) 魏徵等著『隋書』卷八十一・列伝第四十六・東夷。此れより先、范曄著『後漢書』卷八十五・東夷列伝第七十五にも同じ話が載り、「北夷索離國」のこととされている。

(45) 任昉の著作とされる『述異記』は、実は祖沖之が作り、其れが佚亡したのを後人が偽作したものとされている(諸橋徹次著『大漢和辞典』第十一卷二四頁)が、此処に引いた話は、魯迅の編纂した『古小説鈞沈』に、「武昌小吏吾龕得一浮石、取其疑當床頭、化成一女、端正、与龕為夫妻。龕得之、見今本任昉記」とあり、虞世南編輯の『北堂書鈔』には、「述異記云。武帝小吏龕得一浮石、取置牀頭、化作一女、端正、与龕為夫妻」(卷第七十七・小吏一百七十四)とある。

本稿は、「昭和五十四年度指定課題研究助成費」による成果の一部です。

《追記》

本稿校正中、杜光庭著『墉城集仙録』(巻之一)に、玄妙玉女が楚國苦泉の渦泉の辺で仮眠した際、口中に入った日象に感じ老子を孕んだ、とあるを目にした。此れと似た釈迦や僧智の誕生譚が我國に伝来していること、玉女仮眠の場が水辺であること、を思えば、老子誕生譚と『古事記』の「日光感情説話」との間に、一脈の繋がりがあると考えられる。